

美しい南伊豆の海を未来へ

～サンゴが息づくヒリゾ浜を紹介したい～

伊豆漁業協同組合南伊豆支所青年部

高野 克宏

1 地域の概要

私たちの住む南伊豆町は、静岡県の東部、伊豆半島の最南端に位置し、東を相模灘、西を駿河湾、南は太平洋と、三方を海に囲まれた、延長 57.4km におよぶ海岸線を有する人口約 1 万人の町である（図 1）。海岸は岩礁地帯で変化に富み、天城山脈より連なる山を背にし、海と山が織り成す壮大な自然美や、黒潮がもたらす温暖な気候、さらに、いたるところで噴出する豊富な湯量の温泉を目的に毎年数多くの観光客が訪れている。



図 1 南伊豆町の位置

2 漁業の概要

伊豆漁業協同組合南伊豆支所は、平成 21 年 4 月に周辺の 7 漁協が合併した伊豆漁業協同組合の 1 支所で、正組合員 556 人、准組合員 625 人で構成されている。地域の漁業はサザエやアワビなどを対象にした採介藻漁業やイセエビを対象にした刺し網漁業、イカ類やキンメダイなどを対象にした釣り漁業などが中心で、平成 28 年度の水揚げ量は約 82.3 トン、水揚げ金額では約 2 億 2,000 万円であった（図 2）。

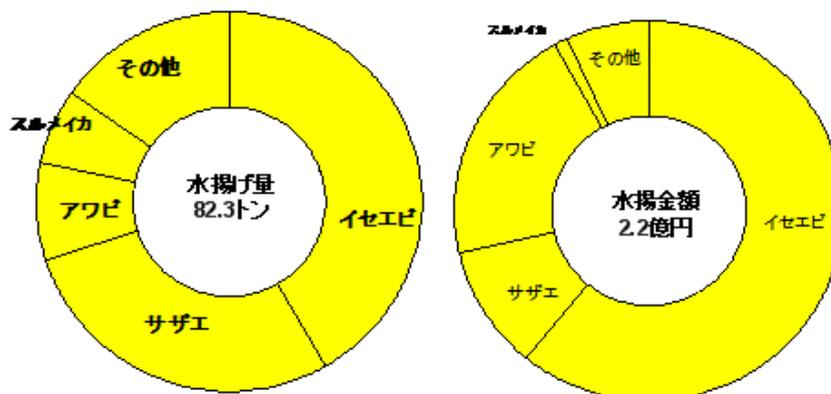


図 2 伊豆漁業協同組合南伊豆支所の水揚げ状況(平成 28 年)

3 グループの組織と運営

伊豆漁業協同組合南伊豆支所青年部は、漁業に限らず、遊漁船業、ダイビング案内業など南伊豆の海と共に生きる若者を中心に平成8年3月に再結成され、現在48人の部員から構成されている。これまで水産資源を持続的に利用するために、マダイ、アワビ等の放流事業やイセエビの資源管理等に部員一丸となって取り組み、資源の増大に努めてきた。また、漁業への理解及び担い手育成のために南伊豆町教育委員会と共催で行っている水産教室を平成8年から継続して実施している。

4 実践活動取組課題選定の動機

南伊豆町の^{なかぎ}中木地区は古くからイセエビの刺し網漁業やサザエ、アワビ等を対象とした採介漁業が行われており、これら漁獲物を提供する民宿業を営む人たちも多い。こうした海の幸、海水浴などの海上レジャーを目的に観光客が訪れるが、中でも特に穴場の観光スポットが「ヒリゾ浜」である。ヒリゾ浜は、人が容易に立ち入れない切り立った崖に覆われた、ありのままの自然が残る海岸で(図3)、多くのサンゴが生息しており、20年ほど前から絶好のシュノーケリングポイントとして知られている。私たちは美しいこのヒリゾ浜を全国に誇れる「中木地区の観光資源」として、多くの観光客を呼び込むことで、地区ににぎわいを創出したいと考えた。また、多くの観光客が訪れても海岸の美しさが損なわれないよう、環境保全の活動もより一層強化すべきと考えた。



図3 美しいヒリゾ浜の海岸

5 実践活動の状況及び成果

「ヒリゾ浜」は交通の便が悪く^{へんぴ}辺鄙な場所にあるが、20年以上前に「伊豆の秘境、プライベートビーチ」としてテレビで紹介されてから徐々に全国にその名を知られるようになったことから、私たちはヒリゾ浜を観光の目玉とし、観光客の呼び込みを図ろうと考えた。そこでまず取り組んだのが、平成9年から開始したホームページでの「ヒリゾ浜」の紹介である。当時、インターネットの普及率は低かったが、「青く綺麗な水」「群れる美しい魚」の写真を紹介した。その後も、インターネットの普及に合わせ、画像の多い綺麗なページを設けるなど、ホームページに工夫を凝らしたことで、さらに多くの方の注目を集めるようになった。また、その頃から客層が「家族連れ」や「水着に浮き輪ス



図4 変化してきた客層

国内のおすすめビーチに常にランクインするようになる



図5 おすすめビーチにランクイン

「ウエットスーツに防水カメラスタイル」に変化してきた。(図 4)。これがきっかけで、首都圏からシュノーケリングを目的とする観光客が多く集まるようになり、人気、知名度はさらに上昇した。平成 27 年のビーチランキング TOP300 (YAHOO JAPAN 調べ) では、2 位に圧倒的な差をつけて 1 位を獲得した。ホームページを活用した取り組みは予想以上の大きな効果を生み、当初観光客は年間 3,000~4,000 人程度であったが、現在では 3 万人が訪れるようになった (図 5)。



図 6 渡船の様子

しかし、一方で観光客の増加に伴い、さまざまな懸念も生じた。その一つが「渡船対応の複雑化」である。「ヒリゾ浜」は船でしか渡れないビーチなので、観光客は前もって渡船を予約して浜に渡っていたが、観光客が多くなると、誰をどの渡船が対応するのか分からなくなり、混乱が生じるようになった。そこで、予約の受付を統合し、渡船を行う漁船 8 隻が協同して組織的に対応できるような体制を構築した (図 6)。さらに、観光客の安全に配慮し、渡船の期間は 7 月第 1 週土曜日~9 月末日曜日と定め、期間中は監視船を常駐させるようにした。加えて渡船スタッフは救急救命講習を受講し水難事故防止に努めている (図 7)。最近では、大型船の新造も行い、より円滑に観光客を案内できるような取組も進めている。



図 7 救命救急講習

もう一つの懸念が「環境悪化」である。そこで、南伊豆の美しい海を守る活動を組織的に行うため、NPO 法人伊豆未来塾と連携し平成 25 年に「伊豆 FNY 活動組織」(図 8) を結成した。伊豆 FNY の主な活動は、漁業者と地域住民と一体になって行う海岸清掃やダイバーによるサンゴの生育場所や種類、個体数等の調査である。さらに、観光客にサンゴ保護に関する啓発パンフレットを配りサンゴを傷つけないよう呼びかけを行っている。また、最終の渡船が終わった後に、海岸清掃を毎日行い、いつでも美しい海岸を楽しんでもらえるよう徹底して管理している。また、ホームページでは「ヒリゾ浜」の紹介と併せて、エビやアワビ等の採取の禁止、メガネを使つてのモリの使用禁止などを記載するとともに、バーベキューの禁止、ゴミの持ち帰り等、海のルールを守るよう注意喚起を行っている。こうした取組の結果、観光客が増えても浜は荒れることなく、美しい景観が保たれている。マナーの行き届いたビーチが評判を呼びさらなる人気向上にもつながっている。



図 8 伊豆 FNY の活動(海岸清掃)

6 波及効果

「ヒリゾ浜」を訪れる観光客が増加し渡船期間中、中木地区の宿泊施設は連日満室になるようになった。そこで、中木地区外の温泉旅館、休暇村、ゴルフ場等と提携して送迎等のサービスを行う取り組みも広がっている。「ヒリゾ浜」は伊豆半島の先端にあるので、ここに全国から大勢の観光客が訪れるようになったことから、中木地区のみならず南伊豆全体の活性化に効果を発揮していると実感している。

この「ヒリゾ浜」の人気も美しい海岸線を保っていかなければ続かない。海洋汚染の原因となる漂流・漂着物、堆積物の処理に参加するボランティアの方々も年々増えてきて、環境保全の意識が高まってきていると感じている。サンゴ礁や魚の群れの保護を伝えることで来訪者のマナーが向上し、「ヒリゾ浜」はさらに心地の良い海岸に成長している。今ではシュノーケラーに対して魚が逃げなくなったとの評判も上がっている。

7 今後の課題と計画

「ヒリゾ浜」を南伊豆の貴重な観光資源と位置づけ、これからもたくさんの観光客が広く利用できるように努めることが重要で、今後は漁業者だけではなく、観光協会とも協働してPRし、さらに知名度を上げていきたいと考えている。

また、子どもたちに南伊豆の海の素晴らしさを伝えるために、地元の小学生を対象に開催している「水産教室」では、毎年海開き直前に「ヒリゾ浜」に渡り海岸清掃（図9）や磯生物観察等を行っている。子どもたちは「ヒリゾ浜」の綺麗な水、生物の多様さを実感し、この浜の環境をいつまでも保っていきたいという気持ちを強く持つようになっている。このような活動から南伊豆の宝である「ヒリゾ浜」を未来へ次の世代へ引き継いでいきたいと考えている。



図9 水産教室で海岸清掃